2022 年度大学入学式 式辞

学長 湯口 隆司

ご入学おめでとうございます。ご入学を教職員一同心から歓迎をいたします。
多くの方がそれまでの高校生とは異なる高校生活をされ、入学されました。コロナ禍の環境の中で､高校 3 年間のうち 2 年間がコロナによる影響のもと高校生活をおくられました。今年の入学式も保護者や来賓の方々には感染防止のため入学式参列をお断りいたしましたが、コロナの影響は保護者の方々にもっと大きな影を投げかけているかもしれません。

また皆さんは昨日 4 月 1 日より、ほとんどの方が成人として大学に入学をされました。お酒とたばこ以外、自由に契約、ローンを組み、アパートを借りるときにも、結婚も親の同意は必要なくなりました。大学も初めてキャンパスに集う全員が大人、成人の組織となりました。

さて一つ先ず皆さんに質問です。活水女子大学で、学びの目標は何ですか。また成人としての目標は何ですか。近い将来の目標、また大学を出てからの目標もあるでしょう。一生を通しての目標もあります。いきなり成人となって危なっかしい所も残っているかもしれませんし、それぞれ心に抱く志は違うでしょうが、教職員一同は心から皆さんの勉学を支援し、応援したいと願っています。

さて活水女子大学はキリスト教の『聖書』の言葉を校名に、それを「建学の精神」として掲げる、キリスト教を土台とした教育を行う大学です。活水とは活ける水のことです。聖書では神様、そして神と同格の愛、真実、正義などと同じ性格を意味することばです。みなさんが入学して、キリスト教学やチャペルアワーという礼拝の時間が活水にはあります。そこでことばを聞き触れる機会があります。
ただこれはスキルの向上とか資格試験などに直接的には関係しないものかも知れません。しかし豊かな自立した成人となるには、自分の内に知識を蓄積するものだけでは足らないと思います。自分の外にいる他者を自覚し、他者である隣人を愛し、祈り合い、さらにはどう手助けできるかを考え、行動できる人を育てたい、よりよい未来を担うことができる女性を育てたい、そのための教育を提供できる場所として私たちはありたい、それを「建学の精神」として大切にしたいのです。チャペルアワー、朝の礼拝の時間はそのような時間なのです。また 2022 年度の学院聖句はペトロの手紙Ⅰ　4 章 10 節「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい」。これも同様の趣旨です。

活水学院は米国の女性宣教師エリザベス・ラッセル先生により 1879 年に創立された学校

です。当時の米国はアジア系移民に対しては、中国人労働者や、日本からの移民にも強い人種差別や隔離政策が国内に存在していました。

今では米国社会の多様性に驚かされますが、当時の教会、メソジスト教会ですら現代のように平信徒、特に女性が海外でキリスト教を伝道することなど認めない時代でした。海外への伝道に熱心な女性たちは教会の予算に頼らず、自分たちだけで海外伝道会を立ち上げ、先ずインド、そして中国と日本に女性宣教師を派遣しました。その一人がラッセル先生でした。

一米国人女性が異国で学校を始める、それを実現したのは「神さまの計画」と人々の祈りです。私は本日入学された皆さんも、ラッセル宣教師と同様の神さまの計らいがあり、皆さんがここに参列されていると考えていただきたいと思います。

活水の土台は『聖書』とそのことばにあると申しました。しかしその言葉そのものが大きな断絶を呼んでいます。

混迷深まる今日、将来への希望を語る「ことば」に対し、その軽さに辟易している人も少なくないでしょう。ロシアによるウクライナ侵攻は、ことばへの不信感を今更ながら募らせる出来事です。侵略をするものには「ことば」は単なる道具です。相手を倒し、自分の支配下に置くために使われる「ことば」があるのです。それは事実を語ろうとする誠意あることばでなく、操作のためのことばです。日本でもかつては大本営発表がありました。同じ状況がロシア国内で起きています。また数年前の米国でも中国との関係悪化で、アジア系住民へのヘイトクライムがありました。どの国でも私たちにも起こり得るのがことばの武力化です。またネット環境は整備されましたが、フェイクニュースやAIを悪用したSNS経由の操作がしばしば起きています。

国境なき記者団という NGO があり、これによると、日本の報道の自由度は、昨年度は60番台です。また報道を利用する私たちにも、便利さと手軽さからAIが選んだ上位のニュースだけを読んでいる。ことばの形骸化、危うさを感じます。これからの皆さんの大学の授業でも同じリスクが潜んでいます。大学では授業の課題が出されます。オンライン授業ではなおさらです。コピペで安易に課題提出することは本当の自由なのか、それは責任を伴った自由だろうか、学問の自由とはなにか、入学後、是非自問していただきたいです。

AI、データサイエンスなどのリテラシー教育は言葉と情報を扱うために必要な技能です。しかし言葉の別の側面、すなわちことばが人を作る、人が考えるという創造的な言葉の側面、時として鳥や花を見て、自然と対話するようなことばは、情報やデータでない言葉です。自分とは何者なのかと考えることば、それを大切にしてほしいです。

聖書を基とした「ことば」もこれと同じです。神は「ことば」です。それは国語という意味でのことばではありません。活ける水を古代のある詩人はこのように神に呼びかけま

した。
「詩編 63:2 神よ、あなたはわたしの神。わたしはあなたを捜し求め／わたしの魂はあなたを渇き求めます。あなたを待って、わたしのからだは／乾ききった大地のように衰え／水のない地のように渇き果てています。」
またある預言者は「イザヤ 55:1 渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め／価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。」とうたいました。活ける水への祈りと神の応答のことばです。
祈りは神さまへの祈りです。祈りは弱さの自覚のなかで、渇きの中で捧げられました。今の日本では渇きを覚える状況はほとんどありませんが、祈りの返答は一人ひとりに必ず返されると私は信じます。

創立者は「活水はたくさんの祈りの子である」と言いました、多くの祈りの結果、活水が建てられ、現在も立っているという意味です。祈るたくさんの人々の存在、それらの祈りによって支えられ、祈りによってさまざまな行動が導かれ、創立されたのです。「活水はたくさんの祈りにより生み出された子すなわち学校なのです」。

神さまは苦しみや悲しみ、飢えや貧困、内部の不和など様々な危機を通して、人々を訓練し、その賜物を活かすように励まします。私たち一人ひとりを神は愛しているがゆえに訓練し、鍛えます。後になって、それが恵みであることに気づくのです。その恵みを一人占めでなく、たがいに仕えるために使うことを薦めるのが今年の学院聖句です。心にとめて一年間を過ごして頂きたいと思います。

大学での学びと生活の困難は必ずあります。また皆さんには環境、人権など、さらには日本そして世界中に共通する平和の課題があります。より良い世界を作るには、みなさんのような若い新鮮な思考と発想が必要です。成人として、自由とそれゆえの責任を自覚しての学びがこの活水女子大学でできるようにと心から祈るものです。

神さまに導かれた誠実で正しい生き方、目標を定めた勉学の上に、「ことば」が皆さんに与えられ、導かれますようにと祈ります。

以上で学長の式辞といたします。